

## ■ 混雑の緩和

Q.「以前は静かだった山が、最近利用者が増えて混雑するようになった」といった苦情を耳にします。ROSはこの問題に対して役立ちますか？

A.はい、大いに役立ちます。ROSはこのような問題に対処するために生まれてきた概念です。苦情の原因は、静かな環境を求める利用者と、混雑をあまり気にしない利用者とが、同じ場所を利用している点にあります。ROSでは、前者の利用者には原生区域を、後者には整備区域を利用できるように設定します。これによってどちらの利用者にも満足してもらうことが可能です。原生区域では、利用者数やアクセスの制限などを通じて、原生的で自然が保たれた静かな環境を提供します。たとえば、我々の試案ではトムラウシ山周辺を原生区域に区分することを推奨していますから、ここでは入込み数を抑えたり、短縮登山道を閉鎖したりすることになります。

## ■ 団体登山ツアー

Q.現在、大人数の団体登山ツアーが盛んに行われていますが、ROSはこうした団体登山ツアーをどう考えますか？

A.原生区域では行うべきではないと考えます。大人数の団体登山ツアーは、原生区域の静けさを損ない、連綿的に高山植生の踏みつけを発生させるため、原生区域の自然らしさを大きく損なう危険性があります。したがって、このような場所では、いわゆるエコツアーズのような少人数で、生態的・社会的な影響が少ないうツアーを推奨します。

## ■ 遭難事故と入山禁止

Q.かつて、クワウンナイ沢で遭難事故があったことをきっかけに、入山禁止措置がとられたことがあります。  
ROSではこの問題に対してどう考えますか？

A.この問題は自己責任をどのように捉えるかに深く関わっています。ROSの考えに従えば、危険や冒険的な要素を含む原生区域では、利用者は自己責任で行動することが前提です。したがって、原生区域と考えられるクワウンナイ沢では、事故が起きたとしても管理者の責任はないと考えます。もちろん原生区域にあることを周知徹底させることが前提です。一方で、整備区域では安全・便利・快適なレクリエーション体験を提供するとしており、利用者もその前提で訪問するため、ここでの事故については管理者の責任がないとは言えません。利用者も管理者もこうした合意の下に、利用や管理を行うことが求められます。

## ■ 高山植物の保護

Q.登山道の踏みつけによって登山道脇の高山植物が消滅しています。ROSはこれに対してどう役立ちますか？

A.高山植物を直接守ることはできませんが、登山道整備の指針を示すことによって、高山植物の保護に役立てることができます。登山道脇の植生踏みつけは、登山道のぬかるみや混雑により、利用者が登山道をはずれて歩いてしまうことによって起きます。これに対しては、登山道の適切な維持管理や利用者数の調整によって対処することが必要です。対策としては2つの方法が考えられます。1つは、大人数の歩行を前提として整備区域に区分し、利用者数を減らす方法です。たとえば、姿見は整備区域への区分を推奨していますから、この場合は利用者数の制限は行わずに、ぬかるみを防ぐ排水溝（水切り）やロープの設置を行うこととなります。

## ■ 高山植物の盗掘

Q.希少な高山植物が盗掘によって減少しています。  
ROSはこの問題に対処できますか？

A.盗掘は犯罪行為として厳しく取り締まることが根本的な対策なので、ROSで直接的に対処することはできません。しかしながら、ROSではより幅広い観点からの次のような考え方を提示することができます。高山植物の盗掘は、登山口からのアクセスが比較的容易で、かつ監視の目が届かない場所で行われます。したがって、高山植物の生育地から登山口を遠ざけるか、監視の強化や利用者を多くすることによって盗掘しにくい環境を作ることが可能です。ROSでは、前者では、より原生性の高い区域に区分し、登山口から生育地へのアクセスを困難にすることが考えられます。これに対して後者では、より利便性の高い区域に区分し、盗掘監視カメラの設置や監視員の増員、他人の目を増やすなど間接的な抑止力を発揮して対処します。

